

雨季の終わりに

柴田康弘

打ちつける朝の雨
まっしろな船の
甲板に人影はなく

とおく
和太鼓のリズムは
届かない

闘しきいを超える鬼たちへ
遠雷のように

別れを告げることができただろうか

迸ほとばしる水流

うねる水泡の力に
あらがう魚たち

光彩が熱くなる
木々の輪郭がきわだち
ざわめき始める

青ざめた陶器の中で
雨季が終わろうとしているのだ

やがて熱風に隠れた
怒りはばたのような羽搏ばたきが
海をわたる